

1876年（明治9），仏教の經典を原典で読むことのできる人材の養成のために，真宗大谷派から南条文雄，笠原研寿の両師がイギリスに派遣されました。そして，1879年（明治12），南条師はサンスクリットを学ぶ目的でオックスフォードにM. ミュラー博士を訪ねたのであります。日本には梵語原典が伝来していると見当をつけていた博士は，南条師に日本における梵文の原典の有無を尋ねたのであります。その時，思い出したのは「幼時，実家の經蔵中で見おぼえのある，慈雲尊者の弟子の集録した『梵文阿弥陀經義釈』の伝わっていること」であったと，南条博士は『懐旧錄』に述べていられます。『義釈』が真宗寺院の經蔵にあったのは，恐らく1805年（文化2）の高倉学寮における夏講の参考書として用いるように，香月院がこの書を所化の人々に勧めていられたからであると思われます。

この『義釈』，『互証』，その他の悉曇の『阿弥陀經』がただちに日本からイギリスへ郵送され，M. ミュラー博士は南条，笠原両師の協力のもとに校訂されて，翌年の1880年（明治13），デーヴァナーガリーの梵文『阿弥陀經』（“On Sanskrit Texts Discovered in Japan”という論文）としてイギリスの『王立アジア協会誌』（JRAS.）に発表されたのであります。それ以後，翻訳，原典研究などが進み，今日ではそれら幾多の成果の恩恵に与って，梵文『阿弥陀經』を読むことができるのであります。

そこで，身の程も省みず，長年の学恩に少しでも報いることができるならばと，香月院師，その他の諸先学が既に試みていられることであります。この梵文『阿弥陀經』と対比しての『阿弥陀經』・「依報段」の試解ということを思い立った次第であります。「依報段」には

極楽の依報，すなわち環境が説かれておりますが，これもまた既に諸先学が明らかにされてきたように，巴・梵・漢・藏の諸經典に類似の文があるのであります。何らかの類似の文のある經典は，この講本に取り上げたものだけでも90種近くを数えます。これら類似の文と『阿弥陀經』・「依報段」の極楽の描写とを詳しく対照することによって，『阿弥陀經』の原典的解明と説意の了解に一歩でも近づきたいと，心から願う次第であります。

2002年7月16日

畠 部 俊 英

目 次

開講の辞

序 章 依 報 莊 巖	1
第一章 宝 樹 莊 巖 —「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」—	7
第二章 宝 池 莊 巖 —「微妙香潔」—	39
第三章 天 樂 地 華 —「衣絨」—	69
第四章 化 鳥 風 樹 (1) —「共命之鳥」—	107
第五章 化 鳥 風 樹 (2) —「其音演暢」—	159
第六章 化 鳥 風 樹 (3) —「微風吹動」—	181

序章 依報莊嚴

『無量壽經』⁽¹⁾に説かれている、大悲の誓願に酬報して成就した阿弥陀仏の仏國土は「真の報仏土」とか「無量光明土」と言われ、『觀無量壽經』⁽²⁾に説かれている、觀想の対象としての極樂世界は「化身土」⁽³⁾とか「方便化身土」と言われている。これに対して、『阿彌陀經』・「依報段」に説かれている極樂國土について、香月院深勵師（1749—1817）は「先づ最初依報段の淨土の相の如きは方便化土の相にしてもなるまいものでもなけれども。吾祖の真土の相とみ給ふとみて。終に彌陀經の淨土を化土なりと宣ふことなし。…。又此經正報段の主莊嚴の彌陀は光明無量の故に壽命無量の故に阿彌陀と名く。これ吾祖真佛土卷に明す処の十二十三の本願成就の光壽無量の真報身なること明けし。此經所説の仏身が真報身なれば夫より前に説くところの淨土も亦真報土でなけねばならぬ」と明示している。したがって、『阿彌陀經』⁽⁶⁾の真報土の世界は、『無量壽經』と同じく「余方に因順して」⁽⁷⁾（梵文『無量壽經』では“samvrtivayavahārena”⁽⁸⁾（「世俗の言い方によつて」とある）説かれていて、それはパーリ、阿含、そして大乗の諸經典において、具体的な都城、場所、世界、仏國土として、更には律藏の「作塔法」に記述されている仏塔とその周辺の配置として説かれているものの一部とほぼ一致している。そして、それらは極樂に類似する描写として諸先学によって夙に注目されてきたところである。わけても藤田宏達博士は、極樂の起源についての近代の諸学者の見解に外

来起源説と内部起源説とがある中で、内部起源説として詳しく述べている。⁽¹⁰⁾ そこで、藤田博士が取り上げているパーリ、阿含、そして大乗の諸經典または律藏の記述を中心に、その他の関係諸經典も取り上げ、『阿弥陀經』・「依報段」との対応箇所を区分けして更に詳しくつき合わせてみたらどうなるのか、『阿弥陀經』の原典的解明と説意の了解のために役立つのではないか、そんな意図から取り組んでみた結果を、ここに纏めてみることにした。

ところで、『阿弥陀經』・「依報段」には、極楽の莊嚴が次のように説かれている。(『阿弥陀經』の原漢訳文は『大正藏』12巻所収本による。読み下し文の一部修正は筆者。)

(1 讃宝樹莊嚴)

また舍利弗、極楽国土には、七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝、周匝し圍繞せり。このゆえにかの国を、名づけて極樂という。

(2 讃宝池莊嚴)

また舍利弗、極楽国土には、七宝の池あり。八功德水その中に充满せり。池の底にもっぱら金沙をもって地に布けり。四辺に階道あり、金・銀・琉璃・頗梨をもって合成せり。上に樓閣あり、また金・銀・琉璃・頗梨・車渠・赤珠・馬瑙をもってして、これを嚴飾せり。池の中の蓮華^{*}、大きさ車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり、微妙香潔なり。舍利弗、極楽国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

* 麗本によって、花を華にする。

(3 讃天樂地華)

また舍利弗、かの仏國土には、常に天の樂をなす。黄金を地となす。昼夜六時に天の曼陀羅華を雨る^{*}。その国の衆生、常に清旦をもって、おのおの衣械をもって、もろもろの妙華を盛れて、他方の十万億の仏を供養し、すなわち食時をもって、本国に還り到って、飯食し経行す。舍利弗、極樂国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

* 宋、元、明の三本によって、天雨を雨天にする。

(4 讃化鳥風樹)

また次に、舍利弗、かの国には、常に種種の奇妙雜色の鳥あり。白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。このもろもろの鳥、昼夜六時に和雅の音を出だす。その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、かくのごときらの法を演暢す。その土の衆生、この音を聞きおわって、みなことごとく仏を念じ、法を念じ、僧を念ず。舍利弗、汝、この鳥は實にこれ罪報の所生なりと謂うことなかれ。所以はいかん。かの仏國土には三惡趣なければなり。舍利弗、その仏國土には、なお三惡道の名なし。いかにいわんや実あらんや。このもろもろの鳥、みなこれ阿弥陀仏、法音をして宣流せしめんと欲して、変化してなしたもうところなり。舍利弗、かの仏國土には、微風、もろもろの宝の行樹および宝の羅網を吹き動かすに、微妙の音を出だす。たとえば百千種の樂の同時に俱になすがごとし。この音を聞く者、みな自然に念佛・念法・念僧の心を生ず。舍利弗、その仏國土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

現在も用いられている科文の一つによれば、『阿弥陀経』は三分科の形式で構成され、その中心である正宗分は大きく二つに分けられている。前半は極樂の依報（環境）莊巖と正報（極樂に住する阿弥陀仏および人々）莊巖が説かれ、後半は念佛往生（あるいは極樂への願生心の発起）⁽¹²⁾が勧められている。前半の依報莊巖が説かれる中で、総じて土名（極樂という名前）が釈される部分と、別して勝相（極樂の勝れた様相）が讃嘆される部分とがあるが、今ここで言う「依報莊巖」とはこの勝相を四つに分けて詳しく説く部分のことにする。上に掲げた『阿弥陀経』の文がそれである。そして、その文を四つに分ける区分の呼び方については、科文の標示を（ ）の中に入れておいた。

なお、以下、〈阿弥陀経〉というように〈 〉をもって経名を表わす場合は、諸異本のもとになった種々な原本の全体を総称するものとして用いる。⁽¹⁴⁾

註

- (1) 『大正新脩大藏經』（以下『大正藏』という）12巻、265頁、下段—279頁、上段。
- (2) 親鸞『顯淨土真実教行証文類』（定本『親鸞聖人全集』第1巻、法藏館、1969年、保存版、227頁）。
- (3) 『大正藏』12巻、340頁、下段—346頁、中段。
- (4) 親鸞、前掲書（定本『親鸞聖人全集』第1巻、269頁）。
- (5) 『大正藏』12巻、346頁、中段—348頁、上段。
- (6) 香月院深励『阿弥陀經講義』（『香月院深励著作集』七、淨土三部經講義3、法藏館、1981年）50頁。同『仏說阿弥陀經講義』八巻（『仏教大系』「淨土三部經」第五所収、1929年、仏教大系刊行会、53頁）。
- (7) 『大正藏』12巻、271頁、下段。
- (8) *Sukhāvatīvyūha*（以下 *Sukh.* という）, édité par Atsuji Ashikaga, Kyoto, Librairie Hōzōkan, 1965, p.38, l.20. なお、以下において引用する *Sukh.* の補正箇所については、藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿經・阿弥陀經』（法藏館、1979年、第

2刷）所収の「梵文補正表（無量寿經）」を参照。

- (9) 藤田宏達『原始淨土思想の研究』（岩波書店、1970年、第1刷）464—465頁。
- (10) 同上、469—473頁。
- (11) 同上、474—505頁。
- (12) 東本願寺版『真宗聖典』（東本願寺出版部、1978年、初版）984—985頁。
- (13) 「極樂への願生心の発起の勧め」については、拙論「『阿弥陀經』読解」（上）（『同朋大学論叢』第37号、1977年、1—14頁）参照。
- (14) 藤田宏達『阿弥陀經講究』（以下『講究』という。真宗大谷派宗務所出版部、2001年）10頁参照。

第一章 宝樹莊嚴

—「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」—

はじめに

又舍利弗，極樂國土，七重欄楯・七重羅網・七重行樹。皆是四寶，
周匝圍繞。是故彼國，名曰極樂。⁽¹⁾

（また舍利弗，極樂國土には，七重の欄楯・七重の羅網・七重の
行樹あり。みなこれ四寶，周匝し圍繞せり。このゆえにかの国を，
名づけて極樂という。）

この箇所に対応する梵文『阿弥陀經』（*The Smaller Sukhāvatī-vyūha*）の文は，次のようにある。

punar aparam Śāriputra Sukhāvatī lokadhātuḥ saptabhir
vedikābhīḥ saptabhis tālapaṇktibhiḥ kaṇkanījālaiś ca
samalamkṛtā samantato 'nuparikṣiptā citrā darśanīyā caturṇām
ratnānām | tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya
sphatikasya | evamṛūpaiḥ Śāriputra buddhakṣetraguṇavyūhaiḥ
samalamkṛtam ⁽²⁾ tad buddhakṣetram || 3 ||

（また，次に，シャーリップトラよ，極樂世界は，七〔重〕の欄楯，
七〔重〕のターラ樹の並木，鈴のついたもろもろの網によって飾
られ，ぐるっと圍繞され，きらびやかで，美しい。[それら七
〔重〕の欄楯などは] 四つの宝石，すなわち金・銀・瑠璃・水晶

からできている。シャーリプラトよ、かの仏国土は、このような、
仏国土のもろもろの功德の莊嚴によって、飾られているのである。
(3)

『阿弥陀經』(および梵文)において、まず問題となるのは「皆是四宝」(梵文では「四つの宝石、すなわち金・銀・瑠璃・水晶からできている」)の箇所の扱いである。従来の読みは「みなこれ四宝をもつて」となっているのであるが、岩波文庫本『阿弥陀經』の「漢文書き下し」では「みなこれ四宝」となっていて、註において「梵本和訳⁽³⁾、153ページ註「四つの宝石からできている」参照」とある。その指示にしたがって、その註を見てみると「その原語 *caturñām ratnāñām* をどの近代翻訳者も「四種の宝で飾られている」「四種の宝で美しい」と解する。しかし属格をそのように解することは困難であろう。これは材料を示す属格 (genitivus materiae) と解すべきである。(Speyer : Sanskrit Syntax, §113, p.84) すなわち欄楯、並木、鈴(鈴のついた網—筆者)などが四つの宝でつくられているのである」とある。「皆是四宝」とは「皆是」で「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」を受けて、「それらはみな四宝からできている」ということである。このことは、既に香月院も注意していて、「囲繞とは取りかこむこと。此を四宝をもととよむは不可なり。只四宝とよむが可なり。…。皆是と云ふを周匝囲繞まで以てくる義なり」と述べている。⁽⁶⁾ 但し、梵文では文法上、「極樂世界は…四つの宝石、すなわち金・銀・瑠璃・水晶からできている」と読める。そこで、このままでは意味が通らないので、岩波文庫本の梵文和訳に「それらは」と補ってあるように「[それら七 [重] の欄楯などは] 四つの宝石、すなわち金・銀・瑠璃・水晶か

らできている」と訳しておく。

ところで、香月院は、この「讚寶樹莊嚴」の箇所を講義している中で、極樂世界をどのように見るのであるかという重要な問題を提起している。

七重行樹とは定善義十二右に觀經の宝樹觀の文の七重行樹を釈して。善導以前の古師の中に此七重行樹と云ふを極樂のぐるりを取り回して七重の並木あることぢやと解して書いてあるとみえる。善導夫を最初に破して弥陀の淨土は廣大無辺際の淨土。豈ただ一の七重の行樹のみならんや。極樂には所所に宝樹の林あり。夫を七重の行樹と説いた者ぢやとあり。さればなぜ七重と云ふやと云ふに善導の釈は諸の宝樹の一本一本の樹にみな七重づつあり。夫は一本の樹に根茎枝條葉華果実の七つあり。それを金銀瑠璃等の七宝をもて成す。大經の説の如く或は根金なれば茎は銀と云ふ如く七宝を成じてあり。其根茎等の七宝をもて互に入れ違へ入れ違へに成りてあるの故に具さに四十九重あり。夫を経文に七重行樹と説くと釈してあり。是れ古今の諸師申さぬ所なり。…。さて欄楯羅網を七重と説いたは如何と云ふに。觀經の上にも一一の樹の上に七重の羅網ありと説いてあり。七重の網が宝樹の上に幾重にも重ねてあると云ふ是は七重に限りはせぬなり。…。欄楯も無量の雜宝をもて成す。故に百千重の欄楯なり。…。如是莊嚴した所の宝樹が極樂國中には所所にあり。故に称讚淨土經には所所皆有⁽⁷⁾ 七重行列妙宝欄楯七重行列宝多羅樹と説き給ふ。

『觀無量壽經』には、定善十三觀の中で極樂を觀想する第四觀として「宝樹觀」が説かれている。その初めに「宝樹を觀ずとは、一一にこれを觀じて、七重の行樹の想をなせ」とある。このことについて⁽⁸⁾

『觀經疏』・『定善義』において善導大師は「これ弥陀の淨國廣闊無辺なることを明かす。宝樹・宝林、あに七行をもって量とせんや」と述べているのであるが、⁽⁹⁾ 香月院はこの善導大師の解釈を取り上げて「善導已前の古師の中に此七重行樹と云ふを極樂のぐるりを取回して七重の並木あることぢやと解して書いてあるとみえる。善導夫を初めに破して弥陀の淨土は広大無辺際の淨土。豈ただ一の七重の行樹のみならんや。極樂には所所に宝樹の林あり。夫を七重の行樹と説いた者ぢやとあり」と説明している。すなわち、善導大師が極樂を「弥陀の淨國廣闊無辺」と言い、香月院が「弥陀の淨土は広大無辺際」と述べているのは、『無量壽經』や天親菩薩の『淨土論』の所説を受けたもので
⁽¹⁰⁾ あり、その広大無辺際の淨土が、善導大師以前の古師が解したような、ただ一つの七重の行樹によって周辺が囲まれ、限定されている国土であるはずがないという、善導大師の極樂に対する見解がここに述べられていると、香月院は見ているのである。このような『觀經疏』・『定善義』における善導大師の極樂に対する見方は絵画によっても表現され、日本では当麻寺の曼荼羅図などに認められる。その「宝樹觀」を描いた箇所では七重の行樹が羅網で覆われ、羅網のあいだにいくつかの宮殿が見られ、行樹の根もとに欄楯が描かれている。ここでは、七重の行樹が欄楯、羅網そして宮殿などによって莊嚴されていて、それが宝樹と呼ばれる所以ともなっており、極樂の各所にあり、また列をつくり、処々に宝林となっているのである。上に掲げた香月院の言葉では「如是莊嚴した所の宝樹が極樂國中には所所にあり」と述べ、その經証として「ゆえに称讚淨土經には所所皆有七重行列妙寶欄楯七重行列宝多羅樹と説き給ふ」と玄奘訳『称讚淨土佛攝受經』(以下『称讚

淨土經』という)の文を引いている。この『称讚淨土經』については、藤田博士によって誤訳例の指摘などがあり、その訳出についての疑惑が提示されている。⁽¹¹⁾ したがって、この「所所皆有…宝多羅樹」の箇所についても注意を要するので、後に取り上げてみたい。

さて、以上のような香月院の所説によって気付くことは、『阿彌陀經』・『讚宝樹莊嚴』の文を理解するについて、『觀無量壽經』に基づく善導大師の「宝樹觀」の解釈が適用されているということである。したがってこの箇所の科文も「讚宝樹莊嚴」と言われているのである。ではこれに対し、現代の諸学者が〈阿彌陀經〉によって、極樂世界についてどのようなイメージを提示しているかを瞥見してみよう。

1

〈阿彌陀經〉における極樂の光景について、中村博士はインド学的視点から、インドの靈場に關係づけて解説され、平川博士は仏教学的視点から、インドの仏塔に關係づけて解説され、仏塔が極樂淨土のモデルであるということを主張されたのであるが⁽¹²⁾、両博士の所説にもとづいて、藤田博士は「類似説からみた起源考」⁽¹³⁾における五番目の類似説として「仏塔の記述」を取り上げ、「作塔法」を述べている諸律藏のうち『僧祇律』卷三十三の箇所を引用した後で、次のようにコメントしている。

まず、「塔を作る法」は仏塔そのものの構造を示したものであるが、それは現存のサーンチーのストゥーパに見られるような構造に対応するものであることが明らかであろう。ここで記された「欄楯」は、サーンチーの欄楯によって確かめられるものであり、

それを巨大化して七重にすれば、極楽の「七重の欄楯」の観念が得られるであろう。つぎに「塔の園林」については、種々の樹を植えて、常に華があることを記しているが、これは極楽に園林・宝樹・宝華があるとするのに対応するであろう。この『僧祇律』には記していないが、『五分律』によると、「塔の左右に樹を植える」とことが説かれている。すると、これはストゥーパの参道が並木であることを意味するわけであり、これを大規模にして七重にすれば、極楽の「七重のターラ樹の並木」の観念が成立するであろう。つぎに、「塔の池」は明らかに仏塔に付属した浴池であり、そこに青・赤・黄・白の蓮華があるとするのは、極楽における蓮池を髣髴せしめるのに十分である。⁽¹⁶⁾ …

以上のように、『阿弥陀経』の「七重の欄楯」や「七重の行樹」や「蓮池」などについて考えることのできる手がかりは、インドのサンチに現存するような、仏塔のまわりを囲む欄楯や、靈場へ至る参道の両側に列をなして聳え立っている並木や、仏教の遺跡や、ヒンドゥー教の寺院などに見られる、四角形で、階段のある浴池などである。梵文と漢訳の『無量寿経』および『阿弥陀経』を英訳したゴメス博士は翻訳者のイメージとして、それらを略図にして提示している。⁽¹⁷⁾ したがって、『阿弥陀経』によれば、極楽国土は現在仏の阿弥陀仏を中心に、七重の欄楯が囲繞し、七重の行樹が聳え立ち、七重の羅網（梵文『阿弥陀経』では「鈴のついたもろもろの網」とあって、七〔重〕とはなっていない）が覆い、周辺には蓮池、その他、以下順を追って取り上げていくような、もろもろの莊嚴によって飾られている世界である。

ところで、パーリ、阿含（梵文を含む）、そして大乗經典の中には、ある都城、場所、あるいは世界などについて説く、その描写の中に「七重欄楯」、「七重行樹」（七重宝多羅樹、七宝行樹など）、「七重羅網（七宝交露）」、または「七重欄楯・七重羅網（七重交露、七重鈴網、七宝交露）・七重行樹（七重多羅行樹など）」とあるものがある。⁽¹⁸⁾ それらの大半は、藤田博士が「類似説からみた起源考」で取り上げている、『阿弥陀経』の成立に先行し、『阿弥陀経』における極楽の観念の形成に影響を与えたと思われる經典である。それは次のような經典である。

〈大善見王経〉類

◇「(七〔重〕の垣、…,) 七〔重〕のターラ樹の並木」とあるもの

(1) パーリ文『大善見王経』(*Mahāsudassana-suttanta*)⁽¹⁹⁾

(2) 梵文『大善見王経』(*Mahāsudarśanasūtra*)⁽²⁰⁾

(3) チベット語訳『大善見王経』⁽²¹⁾

◇「(垣牆七重、…,) 周匝七重、行四宝多羅樹」とあるもの

(4) 僧伽提婆訳『中阿含経』・『大善見王経』⁽²²⁾ (398年訳出)⁽²³⁾

◇「(其城七重、…,) …欄楯亦復七重」とあるもの

(5) 竺仏念訳『長阿含経』・『遊行経』⁽²⁴⁾ (413年訳出)⁽²⁵⁾

◇「(七重城、…,) 七重欄楯、…, 七重宝多羅樹、…, 羅網」とあるもの

(6) 閻那崛多訳『仏本行集経』⁽²⁶⁾ (591年訳出)⁽²⁷⁾

◇「(七重垣院、…,) 多羅樹、…, 欄楯」とあるもの

(7) 義淨訳『根本說一切有部毘奈耶雜事』⁽²⁸⁾ (701年訳出)⁽²⁹⁾

<世記經>類

◇「七重欄楯・七重交露・七重行樹」とあるもの

(8) 法炬訳『大樓炭經』⁽³⁰⁾ (291—312年訳出)⁽³¹⁾

◇「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」とあるもの

(9) 竺仏念訳『長阿含經』・『世記經』⁽³²⁾ (413年訳出)⁽³³⁾

◇「七重欄楯・七重鈴網・七重多羅行樹」とあるもの

(10) 閻那崛多等訳『起世經』⁽³⁴⁾ (597—604年訳出)⁽³⁵⁾

(11) 達摩笈多訳『起世因本經』⁽³⁶⁾ (605—617年訳出)⁽³⁷⁾

小品系<般若經>類

◇「七〔重〕の垣, …, 七〔重〕のターラ樹の並木, …, 金の鈴のついた網」とあるもの

(12) 梵文『八千頌般若經』(Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)⁽³⁸⁾

◇「(其城七重, …,) 七宝琦樹, …, 七宝交露」とあるもの

(13) 支婁迦讃訳『道行般若經』⁽³⁹⁾ (179年訳出)⁽⁴⁰⁾

◇「(其城七重, …,) 七宝琦樹, …, 宝交露」とあるもの

(14) 支謙訳『大明度經』⁽⁴¹⁾ (222—253年訳出)⁽⁴²⁾

◇「(其城七重, …,) 七宝行樹, …, 宝鈴羅網」とあるもの

(15) 鳩摩羅什訳『小品般若波羅蜜經』⁽⁴³⁾ (408年訳出)⁽⁴⁴⁾

◇「(其七重城, …,) 七宝行樹, …, 宝網」とあるもの

(16) 施護訳『仏母出生三法藏般若波羅蜜多經』⁽⁴⁵⁾ (1004年訳出)⁽⁴⁶⁾

大品系<般若經>類

◇「(其城郭以七宝七重, …,) 七宝樹羅列重行(宝樹行列), …,

五百欄楯, …, 七寶鈴」とあるもの

(17) 竺叔蘭訳『放光般若經』⁽⁴⁷⁾ (291年訳出)⁽⁴⁸⁾

◇「(其城七重, …,) 欄楯皆以七宝, …七宝行樹, …鈴網」とあるもの

(18) 鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜經』⁽⁴⁹⁾ (404年訳出)⁽⁵⁰⁾

◇「(七重垣牆, …,) 七宝欄楯, …七重行列宝多羅樹, …覆以金網連以宝繩, 懸以金鈴綴以宝鐸」とあるもの

(19) 玄奘訳『大般若波羅蜜多經』・「初會」⁽⁵¹⁾ (660—663年訳出)⁽⁵²⁾

その他の大乘經典

◇「(其大城壁七重,) 七重欄楯・七重行樹・七重交露」とあるもの

(20) 竺法護訳『海龍王經』⁽⁵³⁾ (285年訳出)⁽⁵⁴⁾

◇「七重欄楯・七重行樹・七重交露」とあるもの

(21) 竺法護訳『普曜經』⁽⁵⁵⁾ (308年訳出)⁽⁵⁶⁾

◇「七重欄楯・七重宝網, …, 宝樹行列」とあるもの

(22) 鳩摩羅什訳『華手經』⁽⁵⁷⁾ (406年訳出)⁽⁵⁸⁾

◇「(其城七重, …,) 七重行樹, 諸宝羅網」とあるもの

(23) 鳩摩羅什訳『持世經』⁽⁵⁹⁾ (401年以後, 卒年とされている409年までに訳出)⁽⁶⁰⁾

◇「(有一大城, …,) 七重行樹, …, 七重鈴網, …, 七重羅網」とあるもの

(24) 菩提流志訳『被甲莊嚴會』⁽⁶¹⁾ (『大寶積經』, 706—713年訳出)⁽⁶²⁾

以上、「七重欄楯」, 「七重羅網」, 「七重行樹」, そしてこれらに近い語句のいずれかがある, または「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」, そしてこれに近い語句がある, パーリ, 阿含, 大乗の, ほぼすべての經典をここに取り出してみた。

さて, これら24例を見比べてみると, 『大樓炭經』では「七重羅網」